京都大学	博士（文学）	氏名	伊藤　令子
論文題目	唐代傳奇「枕中記」研究		

（論文内容の要旨）

本論文にて主に扱う沈既濟「枕中記」は、日本においても「邯鄲の夢」「黄粱の一炊」などの成語の由來ともなった、唐代傳奇の代表的作品である。「別の生涯を長い年月過ごすも、目覺めればわずかな時間しか經っていなかった」という時間構造や、「眠り」の要素が作中にあることから、現在「枕中記」は、登場人物の盧生が別の生涯を過ごす「枕中の世界」を盧生の見た「夢」とみなすことが一般的であり、唐代「夢」物語の一つと見なされる。實際「枕中記」には「眠り」や「夢」の要素が含まれており、「夢」物語として廣く浸透することは不思議ではない。一方で「枕中記」は、その題が示す通り、作中の「枕」と枕の横にある穴を入口とした物理的空間たる「枕中の空間」が存在する。これは、盧生にもう一つの生涯を過ごす世界を提供する重要な機能を有しているが、現在この「枕」や「枕中の空間」にはあまり注意が払われず、「夢」を題材とした物語としての側面のみが注目される傾向にある。

こうした「枕中記」に對する捉え方は、物語成立當初から不動のものであったのだろうか、あるいは後世に讀み繼がれていく過程の中で、「夢」物語という物語認識が一般的になっていった可能性はないであろうか。

本論文ではこのような問題意識の下、「枕中記」の受容の變遷、特に「盧生が別の人生を過ごした物理的空間」としての「枕中の空間」の扱われ方がいかに變化したのかという點と、そうした變化が起きた背景は何であったのかという點を軸に、物語の構造に檢討を加えるものである。

序章では、本論文の目的を述べた上で、主たる題材である「枕中記」と、比較對象として取り上げることとなる同時代の類話「南柯太守傳」の、基本的な物語の内容についてまとめる。また「枕中記」のテキストは主に『文苑英華』所收のものと、『太平廣記』が引いた晩唐の陳翰編『異聞集』出典のものの二系統に分けられるので、テキストとその流布についてもここで触れる。

第1章「唐代傳奇及び唐代傳奇中の「夢」物語」では、「唐代傳奇」がどのようなジャンルであるか、また唐代の「夢」物語には具体的にどのような話があるかを概説する。一般的に、六朝の志怪は、怪を“志（しる）す”という趣旨で記され、そこに書き手の創作意識は介在しなかったとされるのに對し、唐代に發展した傳奇小説は、書き手の創作意識が有ったと見なされる。その創作意識は、唐代の「夢」物語にも窺える。六朝志怪の「夢」にまつわる話の多くは、主に豫兆の夢を簡潔に「記錄」したものであったのに對し、唐代の「夢」物語は、豫兆の記錄のみならず、冥界訪問や死者

との交歡、現實と夢の符合といった様々な要素が混在しており、物語としてより讀み手の關心を引く内容が描かれる傾向にあることがわかる。

第2章「唐代の「夢」物語に關する先行研究」では、唐代の「夢」物語及び「枕中記」「南柯太守傳」に關する先行研究をまとめ、その問題點を分析する。先行研究において、「夢」の語は、人間が睡眠時に見る「儚い夢幻」の概念のみならず、「遊魂」や異界の一種を指す語として議論の對象とされる場合はある。「枕中記」に關する研究でも、魯迅をはじめ多くの研究者が、この作品を「人生は夢の如し」という趣旨の「儚い夢幻」をテーマとする物語として捉える一方、物語から「異界訪問譚」としての要素を見出す論考や、作中の「枕中の空間」に注目する論考も見られる。しかし、なぜそれが「夢」物語として一般化されていったのか、「枕中記」という物語の捉え方の變遷については、從來、分析の對象にはなっていなかった。またこの問題は、「枕中記」と「南柯太守傳」との關わりにおいても同様のことがいえる。「枕中記」は、「南柯太守傳」と“類話”として比較對照されることが多いが、これら二作品も、いつから、またどのような觀點から、同種の物語とみなされたかという問題については、これまであまり檢討されていない。

この第2章で確認した先行研究の問題點から、第3章以降は、「枕中記」の捉え方、そして「枕中記」と「南柯太守傳」とがいかに類話として一括りにされたかという物語の捉え方を中心に考察を進める。

第3章「「枕中記」の“夢”と“異界”を巡る物語認識の變容 ―『太平廣記』の分類を手がかりに―」では、北宋代に成立した『太平廣記』での「枕中記」の分類に注目し、「枕中記」に對する認識の變容を檢討する。『太平廣記』には「夢部」があるにもかかわらず、「枕中記」はそこではなく「異人部」に收錄される。『太平廣記』「夢部」に現れる「夢」を分析すると、「人とそれ以外の存在、あるいは人界とは異なる世界を結びつける」媒介經路としての特色を有していることがわかる。また「夢部」所收の「枕中記」と類似した構造を持つ物語「櫻桃青衣」や「沈亞之」の「夢の世界」と、「枕中記」の「枕中の世界」の空間的特徵を比較すると、「夢部」における「夢の世界」は、物理的な形をもたない「夢」が媒介となって訪れる場であり、また當人の目覚めによって唐突に崩れ去る脆さを有した世界である。それに對し、「枕中記」の「枕中の世界」は、「枕」という物理的な殼に圍まれた空間内に存在し、「枕の穴」という同じく物理的入口を通ってそこに至った後、その世界での死という區切りを以てもといた邯鄲の宿へと戻るのであり、兩者の空間的性格は多分に異なっている。また、「枕中記」が收められる「異人部」は、「市井に現れた不思議な能力を持つ人物」の物語が收錄される。「枕中記」における「異人」とはすなわち「道士呂翁」を指す。この點から、『太平廣記』の捉える「枕中記」とは、盧生が「夢の世界」でもう一つの人生を過ごす物語というよりも、道士呂翁が、盧生を不思議な枕によって人生の儚さを悟らせる物語と捉えられた可能性も考え得るだろう。さらに物語

成立直後から南宋頃までの「枕中記」の扱われ方を見たとき、當初物語を代表する語としては「枕」や「枕中」が用いられていたが、徐々に「夢」や、盧生の過ごした別の生涯が儚い短時間であったかを表す語「黄粱」等が用いられることが増える。これはつまり、「枕」の存在は、後世に下るにつれて薄まりつつあったともいえる。

第4章「後世における「枕中記」の受容－南宋から清代までの「枕中の世界」の變容－」では、南宋から清代に至るまでに「枕中記」がいかに受容されたかを詳細に檢討した。南宋の洪邁や王應麟の叙述では、「道士の枕」の存在が薄らぎ出す兆候は窺えるものの「枕」はやはり物語の象徴として扱われている。しかし元代以降は、「道士の枕」は急速にその影を潜め、元の雑劇『邯鄲道省悟黄粱夢雑劇』や清代の『聊斎志異』所收の小説「續黄粱」などの戯曲や小説では、青年が「別の人生を經驗する」ために必要とした條件は「眠り」や「夢」のみであり、もはや「枕」の存在は不要となっていた（但し、明代の戯曲『邯鄲記』には「道士の不思議な枕」は登場する）。後世の讀者にとって、「枕中記」の中の「枕」は、「眠り」や「夢」に比べると、もはやさほど重要な存在ではなくなっていたのである。

このような物語觀の變化は、「枕中記」と「南柯太守傳」とを“類話”とする認識の形成にも關わる。第5章「「南柯太守傳」と「枕中記」―“枕中”と“蟻穴”の「夢」物語への一元化－」では、主に「南柯太守傳」を取り上げ、「枕中記」と「南柯太守傳」が“類話”とみなされるようになった過程について檢討した。現在「南柯太守傳」は「枕中記」と一括りに、もう一つの生涯を夢見る「夢」物語として語られることが通例である。しかし、物語成立直後に記された『唐國史補』や、北宋初めの『太平廣記』では、「枕中記」と「南柯太守傳」は別種の物語として扱われ、それぞれ「枕」や「蟻（蟻の巣）」といった要素が重視されたことが窺える。「南柯太守傳」は、その後の北宋後半～清代にかけて、詩や小説、戯曲などの中で、「眠り」や「夢」及び時間構造などの要素によって、「枕中記」と“類話”として扱われるようになっていく。一方、「南柯太守傳」は「南柯（太守）」、「槐安」といった語が一貫して物語を象徴する語として用いられ、さらには「昆虫の国」の要素も清代まで引き繼がれており、その受容の様相は「枕中記」とは一線を劃す。

最後の第6章「「枕中記」觀形成の背景－「枕中の空間」の消滅と「陶枕」―」では第5章の議論を踏まえ、「昆虫の国」という要素が殘った「南柯太守傳」に比べ、「枕中記」の「道士の枕」や「枕中の空間」はなぜその存在が隠れていったのかという、捉え方の變容の背景について主に檢討した。この章ではまず、「枕中記」が「夢」と強固に結びついた要因の一部として、①盧生が「枕中の空間」へと入る際に「寐中（眠りの中）」の語が追加された陳翰『異聞集』系統のテキストの流布と、②「人生は夢の如く儚い」といった物語の暗示する寓意の問題を取り上げた。特に、盧生が「枕中」に入る過程に「寐中」の語が加わったことで、盧生が「枕」や「枕中へと入る」行為よりも、「眠り」や「夢」がより強く意識されるようになる。それに加え

て、本章ではさらに「枕」それ自体の變遷にも注目した。「枕中記」に登場する、穴の空いた陶枕は、唐宋代に隆盛したものだが、元から明にかけては衰退していき、明代には日常的な器物ではなくなっている。この陶枕の衰退時期と、「枕中記」において「枕」の存在が明確に薄まった時期はだいたい重なることが見て取れる。こうした點から、「道士の枕の中の空間」が人々の認識下からその重要性が低下していった一因には、人々の捉える「枕」という日用品それ自體の形状が、唐代から變化したことも考え得るのではないかと思われる。

以上、「枕中記」が「人生は夢の如し」を趣旨とした夢物語と捉えることが一般化し、作中の「枕中の世界」が「儚い夢」として扱われることが定着するまでの過程については、次の通りまとめることができる。

唐代～北宋代初め、「枕中記」は、「夢（あるいは眠り）」の要素以外に、物語の「枕中」や「道士呂翁」にも注意が向けられていた。また「枕中記」と「南柯太守傳」とは全く別種の話として扱われていた。その後の北宋後半～南宋にかけて、文人たちの詩歌や敍述の中で、「枕中記」を表す語として「黄粱」や「黄粱夢」が用いられることが増えていく。「夢」の語との結びつきが強まるのみならず、「眠り」や時間構造に共通する要素があることから、「枕中記」は「南柯太守傳」と一對のもの、あるいは趣旨を同じくする「類話」として扱われ始める。元～清代には、「枕中記」をモチーフとした戯曲や小説がいくつか作られたが、「枕中記」を示す語としては引き續き「枕」の代わりに、「黄粱」や「夢」、「邯鄲」といった語が用いられ、さらに、それらの作中にて青年が別の人生を體驗するにあたって、不思議な「枕」とその内部にある空間の存在が全く出てこない作品までも登場する。これは「枕中の空間」の存在感が明確に薄まったことを意味する。そして近年に至り、「枕中記」は、「南柯太守傳」と唐代「夢」物語の代表例として一括されることが通例となり、物語中の「枕中の空間」はほとんど注目・重視されない状況にある。

上記のような認識の定着によって、「枕中記」に備わっていた「道士の枕の中にある異空間」は、「夢」という一語で單純に総括されることとなる。「枕中記」が「儚い夢」物語として定義付けられた結果、その題に掲げられたはずの「枕中の空間」は覆い隠されてしまったともいえるだろう。そしてこうした「枕中記」に對する認識が定着するまでの背景としては、「寐中」や「黄粱」の語が加えられた『異聞集』系統のテキストの流行や「束の間の夢」を想起させる物語の寓意性、類似の時間構造や「眠り」等の要素を備えた物語との共通性に注目する視點の発生、さらに「陶枕」のような内部空間と穴をもつ枕そのものの衰退といったことが擧げられる。

このような幾つもの段階や要因が重なることで、「枕中記」は「人生は夢の如し」を趣旨とする「夢」物語であり、作中に登場する「枕中の空間内にある世界」は、「儚い夢幻」として捉えられることが一般的な解釋・捉え方となったのである。

（論文審査の結果の要旨）

唐代に起こった「伝奇」小説は、中国文言小説の一ジャンルとして、六朝期の「志怪」小説としばしば並び称される。両者には、「怪」や「奇」を記述するという点で共通の要素も多く、魯迅『中国小説史略』は唐代伝奇の淵源は六朝志怪にあると述べる。魯迅は同時に、簡潔な事柄の記録に徹する六朝志怪に比べ、唐代伝奇は起伏に富んだ叙述と華麗な文体を備え、何よりも書き手の創作意図が見て取れると指摘しており、小説が創作作品として発展する上で、伝奇小説は一つの転換点を画したと評価される。中でも本研究が取り扱う「枕中記」は、「夢物語」の代表的作品として、後世や他ジャンルに対して素材提供の面でも大きな影響力を有している。論者は学部卒業論文で「枕中記」を取り上げて以来、この作品が時代を超えて有した影響力の解明に取り組んできた。論者は、その影響力の根幹に有る「夢」という要素が、果たして物語の成立当初から作品を特徴付けるものであったのかという疑問から出発し、受容の歴史を丹念に整理し、読み解くことにより、「枕中記」の根幹に備わっていた性格をあぶりだそうとする。遊魂という寓意や異界訪問譚などの「枕中記」が内包する多様な性格が「夢」に結びつく経緯を論じた研究はこれまで存在せず、「枕中記」研究に新たな視点を提供しうる佳作である。以下、論文の構成に従い、その成果と評価を述べることとする。

本論文が設定する問題意識と伝世テキストの相違を論じた序章に続き、第1章においては、唐代伝奇において「夢」はどのように扱われどのように叙述されるかという基本的な問題を、六朝志怪との比較を通して分析する。それにより、六朝志怪の「夢」は事柄の予兆として簡潔に記録されたのに対して、唐代伝奇では単なる記録ではなく、遊魂や冥界訪問、異類婚や因果応報など多様な要素を物語化する際に、効果的に使われる文学的な素材の一つであったことを指摘する。「夢」が志怪や伝奇で果たした役割を簡潔にまとめた章であるが、ここでの考察は続く各章に生かされ、論文全体のプロローグとして有効に働いている。

「夢」物語に関する先行研究をまとめた第2章に続く第3章は、本論文の白眉とも言いうる章である。ここで論者は、『太平広記』「夢部」に収録される主要な作品を精密に分析し、「枕中記」が「夢部」ではなく「異人部」に収録されることの意味を考察する。「夢部」収録で、異界訪問譚の性格を有する伝奇を「枕中記」と比較する際、論者は、異界への境界を超える往路と、元の世界に戻る復路との描写に焦点を当て、叙述上の特徴や用いられる語彙などを検討する。これは論者独自の着眼点と分析法であるが、それによって「夢部」における異界訪問では、夢の世界と現実の世界が眠りによってのみ緩やかに連続し、復路では覚醒によって強制的に異世界が消失し、そこには「忽」という語が効果的に用いられていることが浮かび上がる。一方の「枕中記」には、描写の上ではっきりとした異世界の入り口とアプローチの過程が描かれ、異世界との別れも、必然的な理由が設定されて元の世界に戻るという相違が見られると論者は指摘する。さらに、「枕中記」が描写する異界の空間的な質感は、むし

ろ事実として記録された六朝志怪と相通ずる特徴で、『太平広記』では「夢部」よりもむしろ「神仙部」の異界訪問譚と多くの共通点を有し、「夢部」所収の伝奇とは異質のものであることを明らかにした上で、『太平広記』が「枕中記」を「夢部」ではなく「異人部」に収録したことには、一定の意味があったと論者は結論づける。『太平広記』の部門分けと内容との関係には様々な見解があり、初出の人名によって名付けられた話柄が機械的に配列されるだけだとの意見も見られる中で、内容と分類に一定の有機的関係を見出した論者の研究は、今後大きな参照価値を有するものとなるはずである。

続く第4章では、南宋以降の「枕中記」受容史の分析を通して、物語がリアルな物理的質感を伴う異界訪問譚から、夢幻の世界、さらには人生のはかなさを説く寓話へと、性格付けが変容する様を論者は記述する。異世界の入り口として重要であった「枕」の存在が希薄化する一方で、眠りと夢に落ちることのみが異世界訪問を媒介する要素として前景化し、あたかも「枕中記」自体が『太平広記』「夢部」の世界に取り込まれていくかの如く変容する有り様を、論者は多様な文学作品、さらにその表現の一つ一つに丁寧に目を配りながら明らかにしており、その分析は説得力を有する。また、第5章では、「枕中記」の類話とされる「南柯太守伝」の異世界訪問譚を取り上げ、両者の共通点と相違点を詳細に分析する。「眠り」や時間構造などの点で確かに相通ずる特徴をもちながら、唐代においては、かたや「枕」、かたや「蟻の巣」という全く異なる要素で象徴され、決して類話とは見なされていなかった両作品が、徐々に「夢」「眠り」という要素のもと、類話として扱われていく過程が、論者のここまで分析した物語論を基礎として鮮やかに描き出される。そこには、論者が第１章において指摘した、「夢」が小説の虚構性を担保する要素として重要なものとなる文学史的背景が想起され、極めて興味深い分析と指摘である。

このように、本研究は「枕中記」の中で「夢」という要素が徐々に肥大化する過程を丁寧に論じた秀逸な研究であるが、幾つか未解決の問題も残される。本研究では「枕中記」或いはその類似の「夢物語」を正攻法で論ずることを重視したため、冥界訪問譚や神仙譚などとの関係は扱っていない。さらに、志怪さらに伝奇研究では見過ごすことのできない仏教説話の影響や、「夢」そのものが中国古代以来どのように捉えられてきたかという、文化史的問題点にも踏み込んでいない。それらを視野に入れて論ずることで、さらに重厚な研究が期待されるのだが、その問題点は論者も十分認識しており、今後研究を発展させる中で取り組んでいくはずである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。令和4年6月24日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。